

群馬大学教育学部附属学校教育臨床総合センター

Center News

Center for Cooperative Research and Development on School Education
Faculty of Education, Gunma University

第3号

(2015年3月31日発行)



「学び合う仲間によるリレー講座」における現職教員の真剣なまなざし

目次

- 2 ● 巻頭言：附属学校教育臨床総合センターのこれから
- 3 ● 寄稿：「学び合う仲間によるリレー講座」に寄せて
- 4 ● 寄稿：教員研修リレー講座を受講して—採用4年目の若手教員の視点から—
- 5 ● 寄稿：着任して思うこと
- 6 ● 寄稿：群馬大学教育学部実践研究に期待される二つの側面の充実に向けて
- 7 ● 報告：附属幼稚園・附属小学校から
- 8 ● 報告：附属中学校・附属特別支援学校から
- 9 ● 報告：学部と附属学校園の教員による研究と教育を目指して
- 10 ● 報告：子ども総合サポートセンター事業概要
- 11 ● 報告：附属小学校における取組—提案授業・授業研究会—
- 12 ● 報告：現職教員の成長を促す温かな学び合いの場
- 13 ● 報告：教育臨床事例検討会～2014年度の取り組み～
- 14 ● 報告：群馬大学教育実践研究第32号発行のお知らせ
- 15 ● 報告：センター協議会・資料室利用状況・フレンドシップ事業
- 16 ● 報告：次年度へ向けた新しい取組の紹介

● 巻頭言

附属学校教育臨床総合センターのこれから

附属学校教育臨床総合センター長 黒羽正見

国立大学改革の下、国立大学法人教員養成大学はミッションの再定義が行われ、本学の附属学校教育臨床総合センターもその存在意義を問われている。多くの他大学のセンターでは教職大学院の設立に相俟った改組の動きを加速させている。本センターでは、一昨年7月に改組を行い、従来の学校教育臨床総合センター3部門に加え、新たに子ども総合サポートセンター、教員養成FDセンター、学部・附属学校共同研究センターの3センターを組み入れ、教員養成・教育臨床に関わる総合センターとして着実に活動してきている。ここでは、本センターの歴史を振り返りながら、本センターのこれからについて述べたいと思う。

1 これまでのセンターの歩み

本センターは、1981年4月1日に教育学部附属教育実践研究指導センターとして開設され、2001年4月1日改組により、3部門から成る現在の群馬大学附属学校教育臨床総合センターになった。

センターニュース第1号(1982年3月)の「センターの組織と運営」よれば、本センターは、教育実践に関する理論的、実践的研究を行うとともに実際の指導力を身に付けた教員の養成を図ることを目的として、(1)教育実習の内容、方法等の改善及び指導、(2)教科教育、教材研究等の実際的な指導法に関する研究及び指導、(3)教育機器の利用法、教材の作成等の指導、(4)授業の各種分析研究、(5)資料収集並びに研究成果の発表、(6)現職者の研修、(7)その他教育実践研究指導に関する専門的事項を主な業務とすると明記されている。特に、当時は情報化教育の推進が課題とされ、施設設備の整備が急務であった。しかし、B棟に広域マルチメディア室が完成したのは2008年であった。

創設から20年を経て改組された本センターは、いじめ、不登校、学級崩壊などの学校教育の諸問題を背景に、教育実習の内容・方法の改善や教員の力量形成・資質向上等に取り組む「教育実習・実践開発部門」、多文化共生社会を実現するための教育と人材育成に取り組む「国際理解教育部門」、不登校やいじめ等の教育相談にかかわる「教育臨床心理部門」の3部門が設けられ、専任教員3名、客員教員1名で構成された。以降、本センターは大学の地域貢献が期待される時代の流れを受けて、公開シンポジウム、情報教育に係わる現職教員・学生研修、子どもと親と教師のための教育相談、フレンドシップ事業、教育臨床事例検討会、教員研修リレー講座、学校現場との協働による教育研究・研修員制度等々、地域に開かれ、地域と学部を結ぶセンターの役割を担ってきたのである。

2 これからのセンターの役割

本センターの使命が、「教育実践に関する臨床の学の創出」とその成果を踏まえた教育、研修および支援に関わる研究機関であることは今後も変わらない。しかし、今日の学校教育の諸問題に柔軟かつ的確に対処し、多様な価値観をもつ児童生徒の教育に情熱をもって取り組んでいく教師の育成が、現在の教員養成大学に強く求められている。したがって、本センターもまた、学部教員とともに教員養成に積極的に取り組んでいくべきであると考えている。

本学部の教員養成は、群馬県教育委員会との連携にかかわる協議会のなかで、「地域とともに行う教員養成」という視点が取り入れ、「実践的指導力と高度な専門性を兼ね備えた教員をめざす大学一学校現場往還型カリキュラム」として、教育現場体験学習(1年次)、授業実践基礎学習(2年次)、本実習(教育実習A5週間、教育実習B3週間)、教職実践インターンシップ(4年次)が体系化され、整備されてきた。

今後は、教職キャリア支援室、カリキュラム管理室(学習指導案作成演習室)、模擬授業室などの養成体制を整え、それらを有機的に統合させながら、それぞれをより充実させていくことが課題である。そのためにも、地域の教育に積極的に貢献できる総合センターとしての役割・機能を強く意識し、県市町村教育委員会との緊密な連携を図りながら、県内小中学校との教育実践のネットワーク化を充実させ、学校現場や地域社会に信頼される総合センターに近づけるように一步一步地道に努力していきたいと思います。

今後とも、附属学校教育臨床総合センター業務につきまして、ご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

● 寄稿

「学び合う仲間による教員研修リレー講座」に寄せて

常葉大学 堀井啓幸

「学びの極み」に学びほぐす

「現代的学校教育課題解決シリーズ 学び合う仲間によるリレー講座」も平成27年度で4年目を迎えるという。本講座のポスターには以下のように書かれている。

「近年の学校や教職員を取り巻く現状には厳しいものがあり、様々な課題に対する早急な対応が求められています。これらの課題を『現代的学校教育課題』にとらえ、その解決に向けて、学びのネットワークづくりに賛同いただいた大学教員が、群馬大学を舞台に、それぞれの研究をもとにわかりやすく語りかけてくれます。教職員の方、これから教員をめざす方、また学校教育に関心のある方など、さらに自分を学びの極みに導きたい方々のご参加をお待ちしております」(平成26年度ポスターより)。

このポスターに書かれている「学びの極み」に導けるのかは難しい課題である。しかし、「学びほぐし」を行うことで参加される方々が課題を解決する何らかのヒントが得られれば「学びの極み」に少しだけでも近づけるのかもしれないと思う。

「学びほぐし」についてはいろいろな捉え方(注)ができるが、大学での学習とは異なる「型にはまらない学び」、多様な実践からの「学び直し」といってよい。とりわけ、教師にとって、子どもたち、保護者、地域住民等、教育実践を通じた様々な関わりの中で学んできたこと(「実践の宝」)を踏まえつつ、子どもや学校を取り巻く教育環境の変化などの視点から現状を見つめなおし、「実践の宝」そのものも見なおすような学び合いができれば、「学びの極み」に近づけるのかもしれない。

わずか90分の出会いであるが、東日本大震災やコミュニティ・スクールなどの今日的な視点から学校と家庭・地域の連携の現状や課題について少しなりとも学びほぐす機会になれば幸いである。

家庭・地域とのネットワークを問いなおす

中教審答申「今後の地方教育行政の在り方」(2013年12月)では、「コミュニティ・スクールや学校支援地域本部等の活用を通じ、社会総がかりで学校教育の質を高めることが重要である」として、「今後、学校運営の充実や、学校・家庭・地域の協働体制の構築に向け、コミュニティ・スクールや学校支援地域本部等の一層の拡大と充実」を求めている。

あえて言うまでもないが、家庭や地域は学校に通う子ども達がそこに生き、その保護者達がそこで生活しているという点で学校教育の前提条件として常に当たり前存在してきた。それは、「無形の教育条件」「潜在カリキュラム」であり、「教育をもって一つの社会過程である」とする教育観からすれば、学校教育の基盤として重要な意味をもっている。その点、学校と家庭・地域の連携、協働は当たり前重要であり、中教審等で提言されたコミュニティ・スクールや学校支援地域本部事業等の意義も大きい。しかしながら、学校と家庭・地域の新たな連携を提言した教育改革の意味の解釈は、閉鎖的と言われてきた学校を改革するという点ではわかりやすいが、一方で、家庭・地域の教育力の低下、特殊な公共施設としての学校の位置付け、学校の自律性と専門性などの問題を考えたとき、単純に具現化しにくく難しい。

今の子ども、そして、教育環境としての家庭・地域をどのようにみて、どのように連携したら、子どもの教育に益するのか。現実にある学校と家庭・地域のつながりや教育改革のなかで学校に求められている新しい家庭・地域とのつながり、そして、不透明な青少年問題のなかで求められる学校と家庭・地域のつながりや連携・協働のあり方について「学びほぐす」機会になればと思う。

(注) 仮宿俊文・佐伯胖・高木光太郎編『ワークショップと学び1 まなびを学ぶ』東京大学出版会 2012年

● 寄稿

教員研修リレー講座を受けて ～採用4年目の若手教員の視点から～

前橋市立清里小学校 教諭 長 壁 高 志

1 参加の動機

教員研修リレーに参加して3年目になりました。私が教員研修リレー講座を知ったのは採用2年目の時でした。大学を卒業してすぐ教員になり、あっという間に1年が過ぎました。初任者研修も終わり、何か自分から学ばなければいけないと思った時に、ふと目に入ったのが職員室の黒板に掲示してあった教員研修リレー講座のポスターでした。場所も近くて費用も掛からないため、気軽に参加しようと思ったのです。

2 初めての参加

どれだけたくさんの人がいるのかドキドキしながら参加したことを今でも思い出します。教室に行ってみると思っていたよりも小さい教室で場所を間違えてしまったのかなと思いました。講義が始まって10人程度の参加者しかおらず驚きました。しかし、この人数が少ないということもメリットだと感じました。

それからは毎年、参加できる日程には必ず参加しています。土曜日の午後に開催されること、自分が参加したい講義を選べること、飛び入りでの参加が認められていることなど、私にとっては参加しやすかったです。

3 講義に参加して

毎年この講義に参加して感じていることが3点あります。

一つ目は大学の先生方の講義を受けることができることです。大学生の時は何となく単位取得のために聞いていた講義が多かったような気がします。しかし、働き始めてみると大学の時にもっとしっかりと聞いておくべきだったことも多く感じます。仕事を始めてから大学の講義を受講できる機会はなかなかないです。また、県外の先生方の講義も聞くことができるのも大変貴重な経験でした。

二つ目は講義内容が多種多様であることです。もちろん教育関係には絞られているのですが、特別支援教育や授業づくり、教育カウンセリングなどいろいろな講義を受けることができました。また、学校の危機管理としての法律のことや学校経営などなかなか受けることができない講義を受けることができ、大変勉強になっています。

三つ目は少人数だからこそ大学の先生や参加者ともコミュニケーションをとりやすいことです。初めての参加の時には少なくても驚きました。一般的に研修会や大学の講義は大人数で参加することがほとんどです。その中で講師の先生や参加者同士でコミュニケーションをとることはなかなかできません。この教員研修リレーは少人数だからこそ、お互いの自己紹介から始まったり、気軽に質問したりしながら進めることができるのです。参加者も管理職の方やベテランの方、大学院生まで幅広く様々な意見を聞くことができました。また、大学のゼミのようなディスカッションで講義を進めていくこともあり、楽しく参加することができました。

4 終わりに

毎年参加して同じ内容の講義でも新しい話題が提示されるなど、新鮮な気持ちで参加できます。また、内容が同じでも、復習になり理解がより深まる気がします。ただ、参加人数があまり増えていないことが悲しいことです。私も職員室の掲示板を見なければ気づかなかったため、この研修が行われていることを知らない先生たちは多いと思います。せっかく開催されている素晴らしい研修にもっとたくさんの方に参加してもらい、群馬県の教育をもっと盛り上げていかなければいけないと感じました。

寄稿

着任して思うこと

附属学校教育臨床総合センター客員教授 井田 廣司

はじめに

群馬大学にお世話になってから早1年が経とうとしている今、改めて責任の大きさを感じています。学生の前に立ち教育相談に関係する情報を如何に伝え、理解を図り、将来において活用できるように援助できるかを考えています。教育相談に関わって以来の経験と学校現場で培ってきた経験と結びつけて、より実際的な教育相談の心を伝えていきたいと考えています。

学生との出会い“コメントカードより”

この1年間、二百数十人の学生に授業を通して出会いました。一度に100人を越える授業では、残念ながら学生との直接的コミュニケーションは殆ど取れませんでした。その中で、コメントカードは出席の確認ばかりでなく、そこに書かれたコメントから学生の声を聞くことができ、授業を進める上で参考になり、励みになりました。例えば、「教師としての立場を考えるのに、参考になった」「教員になった時に、使えそう、やってみたい」「私は、いじめられたことがある。生徒の気持ちがよくわかる。生徒を支えられる教師になりたい」と将来の自己像をイメージした積極的なコメントが多くありました。中には「できるだろうか。大丈夫だろうか」と不安を表すものもありました。100%の学生が自ら教師を前提に書かれていました。コメントの純粹さに触れると将来の教育現場に期待が湧きます。ところが、新聞に残念なニュースがありました。本大学の教員の採用率、その割合は、卒業する学生の半数強であり、残りの学生の半数が次年度以降を目指し、臨時職に就くと記されていました。目の前のこの純粹な心と若いエネルギーをそっくりそのまま現場に届けたいと願っています。

教職を振り返って“学習支援について”

学校が子どもたちにとって「明るく、元気で、楽しい」生活の場になるよう目指してきました。しかし、実際には思うように学習や生活を進められない児童生徒がおり、反省しています。授業の準備、始まってからも教師の指示が伝わらない、聞こえているが行動に移せないなど授業という学級ベースの学習に、作業的にも、理解という面からスムーズにいかないということです。子ども自身にとって大きなストレスであり、かつ、教師にも思うようにいかないもどかしさからストレスになっていました。何とかしたいと個別指導に取り組み、学力向上を目指し校内研修等でしばしば取り組みましたが、十分な結果を得ることは困難でした。指導力の問題、カリキュラムの問題、それとも児童生徒自身の問題又は背景の問題か、一人ひとりの児童生徒の問題としては十分に理解が及びませんでした。様々な原因・要因が考えられるこの問題に、どこかで取り組むことはできないだろうか、子ども中心に考え、サポートする関わりをこれからも模索していきたいと考えています。

スクールカウンセラーの経験より“相談室を考える”

私の経験から相談室について振り返ってみると、気軽に相談に行ってみようというイメージは、児童生徒の中にはなく、心理的距離があるという印象を拭えません。このことは、児童生徒の反応から窺えます。例えば、保健室や廊下での会話で、「相談室へ来てみない?」「話してみないか?」という誘いに、身体を少し引いて「いいです」と小さく手を振る仕草に何度も出会いました。「相談室は特別な場所」「悩みがある子が(病んでいるというイメージで)行くところ」「問題を起こした子が指導される部屋」などの言葉を直接聞いたことがあります。また、相談室から帰る時、辺りの気配に気を配り、誰にも会わないように退室していく姿、少し前まで心を開いていたのに身構える姿を残念に思います。勿論、相談室は特別な関わりや対応が必要な時に適した大変便利な大切な部屋です。周囲の影響を受けにくく、落ち着ける雰囲気があり、特別な時間を過ごせる場所であり、特に大事にしたいところです。ドアを閉じて使う意味があると思います。

しかし、そこを少しオープンに利用できる場所にしたいと考えています。日常の中で使える部屋、身構えることなく立ち寄れる部屋するために、イメージを変えたいと思います。出入りし易い、行けば何かいいことがある、行って良かった、ちょっとした満足感、また行ってみようと思える場所にしたい。ドアは、通常開かれていて、出入りし易く、自由度が高い。複数、友達を誘って行け、ちょっとくつろげるなど多様な受け入れがある。明るく、落ち着き、心地よい雰囲気、リラックスできる場所としての機能と安心感や安全感を持って、責任ある人がいて、駆け込み寺的守られる環境としての機能を持つ、そのような場所に近づけるいいと考えています。

● 寄稿

群馬大学教育学部実践研究に期待される 二つの側面の充実に向けて

紀要編集委員長 小川 正行

群馬大学教育学部実践研究は学会誌でなく紀要としての体裁を充実させるべきものと考え。すなわち、大学の教育実践センターの紀要の体裁を完備するには、組織所属の教育・研究者の研究論文集である側面と、広報誌の役割という二つの側面を備えている必要がある。目次を眺めるだけで、組織にどのような人物が所属しているか、どのような学問が探求されているかが明瞭に伝わるものでなければならない。特に掲載内容に関しては、論文（原著論文、短報）のみでなく、研究ノートや研究資料に加えて、教職員や大学院生の活動状況彙報などの掲載もあることが理想と云われている。編集委員長を仰せつかった当初はそんな紀要を編集できればと思いつつ私議で構想していた。しかし、現実はその甘くなく、思うように進展できずに今日に至ってしまった。その主原因は、編集委員会の「例年に倣って・・・」という「ヤツツケ仕事・・・」で妥協して原稿募集をってしまったことに尽きると云える。具体的には、人文・理数・芸術・保体という多様な分野でそれぞれ独自の専門性を持った研究者の集まりの組織人からの教育実践に関する紀要論文作成に「論述形式に関する体裁は厳しく問わないで原稿募集をしましょう」という単純に原稿を集めれば何とかかなという甘い考えは絶対に禁忌である筈である。さらに、現行の投稿規定の不備改善が、先の編集委員会からの継続検討事項にあるにもかかわらず、改善審議を時間の関係で先送りして、例年に倣い原稿募集をした事である。加えて、募集期間中も前任者からの継続審議項目の査読業務の見直しも検討修正されないままに時間が過ぎてしまったことも委員長裁量の欠落事項であったと反省している。しかしながら、編集結果は形式的な査読で済まざるを得ない作業であったにもかかわらず、例年に準ずるような評価が出来る紀要内容で編集を終了できたと思われるので安堵感はあるものの、編集委員長として当初の所信失効は悔いが残るといのが本音である。今後の本紀要の編集に際しては、投稿される原稿の背景が人文・理数・芸術・保体という多岐にわたる学際分野のものであるので、投稿原稿をすべて論文という大括りで一括処理すべきである。論述の方法や体裁も様々なため、学術業績に匹敵する原稿かどうかの評価を厳密にするには査読者の選定に外部委託を考えねばならないであろう。研究分野の異なる学内の研究者の集まりである組織人のみによる査読では学術誌の査読のようなチェックは到底望めない。査読に関する改善は必須であり、そのためには根本的な視点から体裁構成を検討して投稿規定をまず確定することから始めるのが正攻法と云える。紀要のあるべき体裁を確立しない限り原稿募集はすべきでない。そうでなければ世間が感心納得する紀要の編集は不可能である。論文の要件であるエビデンスの追加・構築には、論述そのものが当を得たモノでなければならない。今般話題になっている独立行政法人理化学研究所のSTAP論文騒動の影響で、大学等で編集される論文作成に関する制約は益々厳しくチェックされる様になるだろうという懸念がある。センター紀要編集委員会の近々の課題としては、今まで以上に投稿者に論文作成に際してのエビデンスを表現する論述に関して、慎重に記載いただくようにアピールする方針でスタートする必要がある。それは、投稿原稿が「論文」なのか「研究ノート」なのか「単なる報告文」なのか的確に分類できるようにするためである。さらに、投稿された原稿はそれぞれの系ごとに編集作業しないと、論文の文体も投稿者の研究分野により論述体裁・方法が著しく異なり、アブストラクト、文献、注、註の表示法もスタイルも異なるため、『ごった煮』のような研究紀要にならざるを得ず、大学の顔としての媒体の実践研究紀要の品位が誇示できない結果を生むことになると云える。

以上の懸念を払拭できるような編集作業が実現できれば、紀要を読むことによって、群馬大学教育学部の育む教育実践に関するエビデンスの追加や組織の存在価値の未来像が見えるようなものを刊行できると確信しています。そして、実現を期待しています。

● 報 告

附属幼稚園から

附属幼稚園 飯 島 雅 年

「友達とかかわる力をはぐくむ保育」を研究主題に掲げてから3年目を迎え、今年度をまとめの年として研究に取り組みました。昨年度までの研究で明らかになったことは、かかわる力の土台は主体性であり、幼児がその力を発揮するためには自信をもつことが大切であるということでした。こういったことを踏まえ、今年度は、全ての幼児は『感じている』を前提として研究を進め、幼児一人一人に着目し、友達とかかわる力をはぐくむための教師の援助や環境の構成の在り方について追究しました。目指す幼児の姿を、園の教育目標等を踏まえつつ、『感じる』をキーワードに各学年毎に設定しました。そして、幼児一人一人の『感じる』に着目した事例を基にした保育カンファレンスを繰り返し、それぞれの考察から見えてくることを話し合い、かかわる力をとらえ直していきました。また、研究の中で、教育課程の改訂にも取り組みました。これまで月毎に立案し、見直してきた年間指導計画を、「友達の様相」を踏まえ、入園から修了までを「期」でとらえ直すという大幅な改訂を進め、27年度の教育課程を編成してきました。

このような研究を進める中で、今年度も2回の公開研究会（6月5日（木）、10月25日（土））を実施しました。県内外から両日合わせておよそ300名を超える方々の参加がありました。午前は保育参観、午後には「保育を語る会」を行いました。「保育を語る会」では、参観した保育から気付いたことや日頃の保育実践の中で考えていること等を出し合い、自分の保育について振り返ったり、よりよい保育について共に考えたりしました。自分では気がつかなかったことに気付いたり、子どもをよく理解して見守ることの大切さ等を改めて考えさせられたりしました。また、第2回公開研究会において、國學院大學人間開発学部教授 神長美津子 先生に「『幼児期の学校教育』に期待すること」と題した講演をしていただきました。子ども・子育て支援新制度といった幼児教育をめぐる国の動向や新たな園内研修の進め方等、これからの幼児教育について示唆をいただきました。

次年度から新たなテーマで研究に取り組みますが、これまでの研究の成果と課題を生かし、今後も研究や実践を積み重ねていきたいと考えています。

附属小学校から

附属小学校 高 橋 学

今年度、附属小学校では、教育実習生や教職経験が比較的浅い先生方の手引きとなる「教師へのとびら」の改訂を行いました。学習指導案の形式を見直したり、実践例も新しいものにしたりして、各教科・領域の指導に関する基本的な考え方や実践的なノウハウをより分かりやすくまとめましたので、実習生だけでなく、現場の先生方にもぜひ役立てていただければと考えております。

教育研究では昨年度より「知を創造する子どもの育成」をテーマに研究を進めています。5月に行われた公開研究会では900名を越える参加者を迎え、公開授業を基に子どもたちが思考力・判断力・表現力等を働かせて、知識・技能を創り出していくための単元・題材構想のあり方について共に考えることができました。その中で、子どもたちによる主体的な学習が展開された際に、思考力・判断力・表現力等がよりよく働き、「知」の創造が促進されることが明らかになりました。そこで、秋からは子どもたちの主体性に目を向けた研究を行ってきました。学部の先生方の研究へのご協力や、群馬県教育委員会の指導主事の先生のご指導をいただきながら、計11回の提案授業（研究途中の授業になりますが、例年公開しておりますのでぜひご参加ください）を通して、仮説の検証と新たな仮説の形成を繰り返してきました。その結果、子どもたちが目的や方法などの見通しをもって学習活動を行い、それを適切に振り返ることで主体的な学習が展開されることが明らかになってきました。各教科・領域ではさらに、子どもたちが自ら見通しと振り返りを行えるよう指導上の工夫について研究を深めています。この研究の成果については、来年度の公開研究会で発表したいと考えております。



公開研究会 総合的な学習の授業風景

● 報 告

附属中学校から

附属中学校 五十嵐 正 登

附属中学校では、「教科の本質に迫る授業の創造Ⅱ」を研究主題に掲げ、今年度からサブテーマを「つながりを意識した指導を通して」として、教育研究活動を進めています。

各教科の単元・題材で身に付けさせたい知識や技能をあらためて明確にし、それらの理解と習得を深めながら思考力や表現力を伸ばしていける生徒の育成を目指しています。共通する手だてとして、知識と経験、思考と思考、人と人が「つながる」指導を基盤に研究を進めています。

道徳は「対話を通して価値に対する理解を深め、よりよく生きようとする生徒の育成」、学級活動は「励まし合いの中で、お互いを生かすことができる集団づくり」を研究主題に掲げ、よりよい人間関係を醸成する授業実践のあり方について研究を進めています。

学校保健は、「睡眠の大切さを理解し、よりよい生活スタイルを確立できる生徒の育成」を研究主題に掲げ、保健委員会の生徒が運営をする「すこやかタイム」や、道徳や学級活動と連動させながら実践研究を推進しています。

9月の公開研究会では、各教科の公開授業および授業研究会、道徳・学級活動のパネル展示、学校保健実践研究会を行いました。県内外から多くの先生方に参加していただき、多くのご示唆を賜ることができました。



公開研究会 社会科の授業風景

附属特別支援学校から

附属特別支援学校 島 田 洋

本校では、開校以来「子どもがいて、学校がある」を信条として、子どもの自立や社会参加を目指し、一人一人に合わせた教育活動を行うことを大切にしてきました。そのため、個別の教育的ニーズを把握して個別に教育課程を編成し、運用してきました。そして、子どもが授業で身に付けたことを評価し、授業改善を行ったり、次年度の教育課程の編成や個別の指導計画の作成などに生かしたりしてきました。

平成25年度から、「学びを生かし、生き生きとした暮らしを拓く児童生徒の育成」を研究主題としました。平成26年度の研究では、副主題を「地域社会への参加を見通した合理的配慮の提供に向けて」とし、一人一人の教育的ニーズに応じた指導及び支援によって、子どもが必要な力を身に付け、身に付けた力を学校や家庭、地域で発揮できるようにしていくために、次の3つの点を重視して、研究に取り組みました。1つ目は、日々の授業実践における評価を活用し、一貫性と継続性のある指導及び支援を行うことです。単元ごとに子どもの変容や有効だった支援を評価して記録・蓄積していきます。その評価の蓄積を活用して、授業づくりや、家庭や関係機関へ情報提供を行うようにしました。2つ目は、交流先や実習先などといった関係機関との連携を深めるための情報提供の在り方です。情報提供の際、評価の蓄積の中から必要な情報を選択して交流先や実習先の関係者に伝え、支援について一緒に検討するようにしました。3つ目は、交流及び共同学習における合理的配慮の提供の在り方です。交流及び共同学習の際、一人一人の子どもが合理的配慮の提供を受けられるように、本校と交流先の教師の双方が活動や支援について検討し、実践しました。実践後、授業における子どもの姿から支援の妥当性を評価し、次の授業に生かすようにしました。

平成26年度の成果として、評価を活用した家庭とのさらなる連携を図ることができました。また関係機関への情報提供によって支援の方針を共有することで、交流先と連携した合理的配慮の提供につながりました。課題として、関係機関との日常的な連携や、評価の蓄積を活用した適切な目標や学習活動、支援の設定があります。

今後も研究を重ねる中で、日々の授業実践の充実を図って子どもの力を高め、子どもがその力を地域社会で発揮できるような個別の支援を提供できるようにしていくことを追求していこうと考えています。

● 報 告

学部と附属学校園の教員による研究と教育を目指して

教員養成FDセンター長 川 上 晃

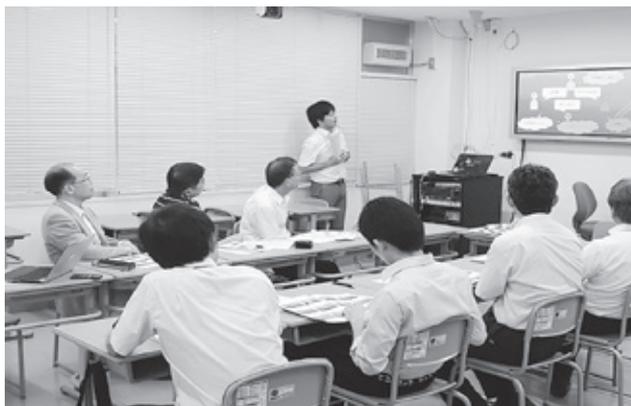
FDセンター活動の中心になるのは、附属学校園で行われる公開研究会や教育実習の授業参観、授業研究会への参加、教育サロンでの新任学部教員と学部教員の意見交換などであるが、これまでの活動の中では大学教員からみた授業研究や教育実習の話題が比較的多かった。今年度は附属小学校の先生方にお骨折りいただき、教育現場からみた授業研究や教育実習の話題を提供していただいた。今後も、附属学校園と学部の教員がたがいの研究や教育に目を向けていけるようつとめていきたい。

1 新任学部教員研修会

新任の先生2名をお迎えして、4月4日(金)に「新任学部教員研修会」を開催した。「教育学部の歴史、組織、特色、本学の取り組み」、「附属学校園の役割」、「教員養成のしくみ」についての説明をおこない、最後に平成26年度の附属学校園の公開研究会や教育実習の日程説明をおこなった。

2 第1回教育サロン

7月7日(月)の教育サロンでは、附属小学校公開研究会の授業や授業研究会について、新任学部教員、学部教員のご感想やご意見を聞かせていただいた。また、附属小学校の先生方から、「附属小学校における授業研究の意義と概要」というテーマで発表をしていただき、それを受けて教員間で討議を行った。附属小学校からの発表ははじめてのことであり、大変意義深かった。



第1回教育サロン



第2回教育サロン

3 第2回教育サロン

教育実習終了後の12月10日(水)に開催された。今年度はFDセンターに附属中学校副校長にも参加していただいたので、第2回教育サロンでは、附属小・中学校と学部の教員が一堂に会して、教育実習について語り合うことができた。また、第1回教育サロンに引き続き、附属小学校の先生方により、「教育実習の概要と実習指導実際」のプレゼンテーションが行われ、それについて活発な意見交換が行われた。

● 報 告

子ども総合サポートセンター事業概要

子ども総合サポートセンター長 懸 川 武 史

1 研究「学びのユニバーサルデザイン (UDL) に基づく授業研究の在り方」

CAST (Center for Applied Special Technology) によるUDLの理念「子ども一人一人の学びを保障する」に基づき、教育実践を通し研究を推進する。

UDLのガイドラインを活用した授業デザインについて研修し、体育科、外国語活動、国語科での公開授業を行う。

2 「訪問相談」※平成26年度支援ケース数：幼稚園、小学校、中学校の4校53ケース

様々な、課題を抱える子どもへの対応に取り組もうとしている県内の幼稚園、保育所、小学校、中学校の依頼に応じて、学級経営アドバイザー（附属小学校スタッフ）と特別支援教育コーディネーター（附属特別支援学校スタッフ）の2名で学校園を訪問する。

3 「研修支援」

県内の教育関係者を対象に、公開研修会の開催や、研修講師の派遣、検査器具の貸出等を行い、それぞれのニーズに応じた研修の機会を提供する。

| 開催日 | テーマ | 参加者数 |
|-------------------------|---|--------------|
| 6/15 | 第1回事例検討型ワークショップ 「発達障害のある児童生徒のとらえ方について」 | 17 |
| 7/26 | 第2回事例検討型ワークショップ 「発達障害のある児童生徒への個別の指導計画の作成について」 | 21 |
| 12/6 | 第3回事例検討型ワークショップ 「個別の指導計画に基づく指導と評価について」 「医療と教育の連携について」 | 19 |
| 5/28・6/11・ 7/22・8/27 | 群馬大学公開講座「子ども一人ひとりの学びをデザインしよう」 | 40 (延べ人数) |

4 個別・グループ・集団指導 (年間 15回 開催)

県内の小・中学校に在籍する特別な支援を必要とする児童生徒とその保護者を対象に、指導・支援を行う。そこで見られた児童生徒の様子を基に、センター・在籍校・保護者の三者が在籍校や家庭でのよりよい支援について検討していく。

※保護者・在籍校担任等研修会 (2回 開催)

9/17「成人期の発達障がい害者の相談から考えること」

12/3「発達障害のある児童生徒の思春期における課題と家族支援について」

5 平成26年度事業「報告書」3月 配付

● 報 告

学部・附属学校共同研究センター 附属小学校における取組 ～提案授業・授業研究会～

学部・附属学校共同研究センター長 江 森 英 世

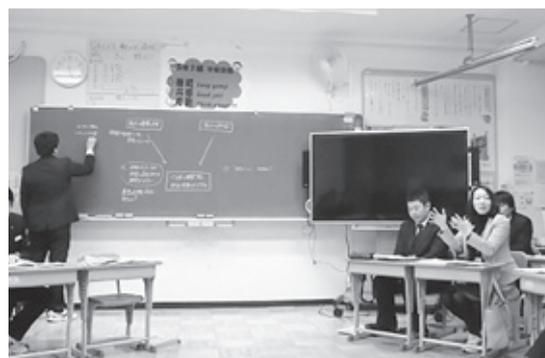
附属小学校では、各教科等部の研究の方向に沿った提案授業を実践・公開し、各教科等部の研究内容の妥当性、有効性について、その授業事実を基に討議することにより、研究の具体化及び一人一人の教員の授業力の向上に資することを目的に、10月下旬から2月上旬にかけて提案授業、及び授業研究会を実施している。

各教科等部の研究の方向、及び授業研究会の深化に寄与できるよう、附属小学校における提案授業・授業研究会に、以下のセンター運営委員、あるいは、各教科等の研究協力者の学部教員が参加した。

〈提案授業 参加者一覧〉

| 役 職 | 職 員 名 | 日 時 | 備 考 |
|---------|----------|-----------------|---------------|
| 教育学部 教授 | 益田 裕充 先生 | 平成26年 11月 4日(火) | 理 科 研 究 |
| 教育学部准教授 | 濱田 秀行 先生 | 平成26年11月11日(火) | 国 語 科 研 究 |
| 教育学部 教授 | 西園 大実 先生 | 平成26年11月26日(水) | 家 庭 科 研 究 |
| 教育学部 教授 | 江森 英世 先生 | 平成26年11月28日(金) | 算 数 科 研 究 |
| 教職大学院教授 | 山崎 雄介 先生 | 平成26年12月 4日(木) | 道 徳 研 究 |
| 教育学部 講師 | 宮崎 沙織 先生 | 平成26年12月 9日(火) | 社 会 科 研 究 |
| 教職大学院教授 | 懸川 武史 先生 | 平成26年12月11日(木) | 生 活・総 合 研 究 |
| 教育学部准教授 | 中里 南子 先生 | 平成27年 1月22日(木) | 音 楽 科 研 究 |
| 教育学部 教授 | 上原 景子 先生 | 平成27年 1月27日(火) | 外 国 語 活 動 研 究 |
| 教育学部准教授 | 鬼澤 陽子 先生 | 平成27年 2月 2日(月) | 体 育 科 研 究 |
| 教育学部 教授 | 茂木 一司 先生 | 平成27年 2月 6日(金) | 図 画 工 作 科 研 究 |

- 提案授業は5校時または6校時(45分間を原則)とする。
- 授業研究会は、研究授業を実施した日の16:30から行う。
- 授業研究会は120分間とし、その内容は、次の時間を目安とする。
 - ・ 研究の方向及び授業説明……………20分間
 - ・ 質 疑……………20分間
 - ・ 討 議……………65分間
 - ・ 指導講評……………15分間



平成27年2月2日(月)
体育科授業研究会の様子

● 報 告

現職教員の成長を促す温かな学び合いの場

教育実習・実践開発部門 黒羽正見

平成26年の「現代的学校教育の課題解決シリーズ2014」の「学び合う仲間による教員研修リレー講座」が、次の日程・内容の通り行われました。延べ参加人数は86名でした。今年度も教員一人ひとりの問題意識に支えられた、温かいつながりのある学び合いができました。多忙感を加速させる学校現場において、何とか仕事をやり繰りして、学校現場のリアリティを惜しみなく提供していただいた先生方に、改めてお礼申し上げます。

2014 現代的学校教育課題解決シリーズ日程

学び合う仲間による教員研修リレー講座

| 講座日 | 担当/所属/専門分野 | 内 容 |
|----------------|---|--|
| 第1回講座 5月17日 | 13:30~15:00 (常葉大学) 堀井啓幸 教授/教育経営学 | 学校と地域の連携の意義を考える — コミュニティ・スクールの現状と課題 — |
| 第2回講座 5月24日 | 13:30~15:00 (群馬大学) 霜田浩信 准教授/障害児心理学 | 発達障害の理解と支援 |
| 第3回講座 5月31日 | 13:30~15:00 (群馬大学) 渡部孝子 准教授/言語教育 | 小学校外国語活動の可能性を広げるアプローチ |
| 第4回講座 6月7日 | 13:30~15:00 (群馬大学) 益田裕充 教授/授業づくり論 | 授業研究の視点と方法 |
| 第5回講座 6月21日 | 13:30~15:00 (富山大学) 松本謙一 教授/生活・総合学習 | 生活科・総合的な学習充実のための課題と方法 |
| 第6回講座 6月28日 | 13:30~15:00 (上越教育大学大学院) 稲垣応顕 准教授/カウンセリング | キャリア支援に活かす教育カウンセリング |
| 第7回講座 7月5日 | 13:30~15:00 (東京学芸大学) 佐々木幸寿 教授/教育行政学 | 学校の危機管理 — 先生のための法律 — |
| 第8回講座 7月12日 | 13:30~15:00 (群馬大学) 黒羽正見 教授/教師教育 | 変動社会における道徳教育へのアプローチ — 教師の暗黙知に着目して — |

ここで、各講座に参加した先生方の感想を紹介させていただきます。

- ・具体的な例をあげての研修で、現在担当している子どもの場面が何度も頭に浮かんだ。対象児の年齢にかかわらず、共通した「つまずきのパターン」の原因の捉え方を教えて頂き、これからの活動に生かしていきたい。
- ・学校とは一つの組織として家庭・地域との連携を深めていく大切さを改めて感じた。現状では家庭と地域との繋がりは多々あると思う。その繋がりを連携にしていく必要がある。
- ・英語教育の必要性とどのように生徒に英語力を身に付けさせるかに関してよく理解できた。また日本人の特性として、豊かさ故のチャレンジ精神や情熱の欠如について考えさせられた。社会科の授業で10分でも英語を取り入れる活動をするのも良いかと思った。
- ・授業にストーリー性を持たせる内容には考えさせられた。ねらい、目標、目的、問題、題材、等の言葉の使い方はよく理解すべきだ。「新しい職業観」の話は凄く興味深かった。
- ・生活科・総合での教育の大切さを実感できた。特に教える内容が決まっていないからこそ無限の可能性が広がっていく気がした。
- ・非常に分かりやすく参考になった。我々教員は、もっと法的な知識を持つべきである。
- ・道徳は人の生き方を教えることであり、それには教員が絶えず成長し続ける必要性を実感した。その意味からも、教師の暗黙知は大切であり、奥が深いものであると感じた。

どの講座の感想からも、教師個々人が学び合い自己を冷静に認識・理解するための自己省察の営みが窺えました。今日の教師受難の時代を乗り越えるには、教師個々人が「今の言説」に惑わされないための「柔らかな眼(知)」を獲得することが不可欠です。今の学校教育に対する自身の問題意識を大切にして、一緒に学び合い、高め合いながら、私たちを取り巻く厳しい教育現実の状況を乗り越えていけたらいいですね。大学に足を運んで、共に学び合って高まりませんか。



● 報 告

教育臨床事例検討会 ～ 2014年度の取り組み～

教育臨床心理部門 岩 瀧 大 樹

教育臨床心理部門では、4年目の活動となる「教育臨床事例検討会」において、有機的に教員、スクールカウンセラー、教育相談員などを支援することにより、地域への貢献を目指してきました。今年度は3名の新たなメンバーを迎えることができました。従来通り、学校教育臨床総合センターのHPでも内容をお知らせしておりましたが、今年度は特に各メンバーが教育相談やスクールカウンセリングに関心のある方々にお声をかけてくださったようです。また、ベテランのカウンセラーから新任のカウンセラーまで、多くの方々にお越しいただくことができたため、多面的に問題の理解、コンサルテーションの方法、教員とスクールカウンセラーとの連携などについて、意見を深めることにつながりました。メンバーは毎回遅い時間にもかかわらず、それぞれの勤務を終了した後に、学校教育臨床総合センターに駆けつけ、熱いディスカッションを展開してくださいました。概要は以下の通りです。

群馬大学教育学部附属学校教育臨床総合センター
2014年11月教育臨床事例検討会のご案内

深謝の儀、皆様におかれましては、ますますご活躍のことと拝申し上げます。
さて、学校教育臨床総合センターでは、教育相談に関わる先生方同士で学び合い、研鑽し合うとともに、同じ仲間同士で悩みを打ち明けあう機会を設けてまいります。
11月は、メンバーの多い小学校スクールカウンセラーの先生が事例の提供をお願いいたしました。多くの先生方の協力をありがとうございました。

【小学校における教育相談事例】

事例提供: 群馬県の立小学校スクールカウンセラー
期日: 2014年11月25日(火) 19:30～21:00
場所: 群馬大学教育学部附属学校教育臨床総合センターA棟1階(A110)
参加費: 500円(簡単なものをご用意しております)
連絡先: 学校教育臨床総合センター 027-220-7384
mailto:ksl@gunma-u.ac.jp

メンバーの先生方は、メールマガジンを以てご出席のお願いをさせていただきます。
教育臨床事例検討会では、ともに学び合える仲間を大切にいたします。関心をお持ちの方は、11月24日(日)までに上記メールアドレスまでお問い合わせいただけますようお願いいたします。事例というテーマの内容を取り上げるため、ご出席のお願いをさせていただきます。

お楽しみに！



2014年度の教育臨床事例検討会の活動

| 回 | 実施日 | 時間 | 事例提供者 | 事例 | 参加者 |
|----|------------------|-------------|-----------------------------------|--------------------------------|-----|
| 1 | 2014年 5月27日 (火) | 19:00～21:00 | 県内公立学校スクールカウンセラー | 今年度から情緒教室に籍を置いた小学生きょうだいと母親への支援 | 7名 |
| 2 | 2014年 6月24日 (火) | 19:30～21:15 | 県内公立学校スクールカウンセラー | 家庭の事情で遅刻しがちな児童への援助 | 8名 |
| 3 | 2014年 7月22日 (火) | 19:30～21:15 | 県内公立学校スクールカウンセラー | 学級担任との協働を取り入れたSCによる支援 | 6名 |
| 4 | 2014年 9月30日 (火) | 19:30～21:15 | 県内公立学校教諭 | 小学校低学年における教育相談実践事例 | 5名 |
| 5 | 2014年 10月21日 (火) | 19:30～21:00 | 県内公立学校生徒指導嘱託員 県内公立学校スクールカウンセラー | 人間関係がうまく取れない生徒への対応と支援 | 7名 |
| 6 | 2014年 11月25日 (火) | 19:30～21:15 | 県内公立学校スクールカウンセラー | 小学校における教育相談事例 | 9名 |
| 7 | 2014年 12月16日 (火) | 19:30～21:15 | 県内公立学校スクールカウンセラー | 体調不良(腹痛)を訴える高校女子生徒への個別面談 | 9名 |
| 8 | 2015年 1月27日 (火) | 19:00～21:15 | 県内公立学校スクールカウンセラー | 小学校での教育相談事例 | 7名 |
| 9 | 2015年 2月17日 (火) | 19:00～21:15 | 参加メンバーによるグループワーク | 非構成的グループエンカウンター的手法による事例検討 | — |
| 10 | 2015年 3月 | 検 討 中 | 検 討 中 | 検 討 中 | — |

2015年2月時点での報告とする。

今年度は、小学生から高校生までの幅広い発達段階にある児童・生徒に関する支援について検討することができました。今年からメンバーに加わった、新任のカウンセラーからは、「着任して、学校のシステム、実際の子どもへの関わりなど、分からないことや不安なことがたくさんあり、心細い気持ちもありましたが、この会で様々な意見交換ができたことで、自分の臨床の幅が広がったように思います。特に学校の先生方との連携の

方法について効果的な方法がないかと考えていましたが、ベテランのカウンセラーの皆さんの意見や実践、体験などを聴くことができ、多くのヒントを頂いたのはとても有意義でした」という言葉を聞くことができました。火曜日の夜を楽しみにして下さるメンバーも増えてきており、今後、さらに地域の皆さんと共に、学校教育相談の充実に努めていきたいと思っております。



● 報 告

群馬大学教育実践研究第 32 号発行のお知らせ

紀要編集委員長 小 川 正 行

群馬大学教育実践研究は、今年もCDに保存した電子データでの配布となりました。紙媒体のよいところは、机の上に置いておくだけで、冊子の内容が表紙の執筆者・題目一覧等から見えてくるところです。ただCDに保存し配布した場合には、その表紙すら人目に付かないということも生じてきます。そこで、このニュースレターのお借りして、第32号の題目ならびに代表執筆者の一覧を掲示いたします。これと思った論文がありましたら、配布しましたCDまたは大学HPを開いて関心のある論文を読んでいただけたら幸いです。

| 題 目 | 代 表 著 者 |
|---|--|
| 高校数学の授業における創発的思考の分析 | 内田靖子・江森英世 |
| 自然の造形の巧みさを実感できるカエデの翼果模型の教材開発 | 須藤春香・佐野(熊谷)史 |
| 高等学校音楽科教育における「創作」のあり方 | 西田直嗣 |
| 音楽専攻学生と児童生徒が共に育つ音楽鑑賞教室実践の意義 —教育学部と附属特別支援学校の共同研究から見る一考察— | 菅生千穂・木村曜子・石井達也・松本 優 |
| Gの杜プロジェクト「かこ・いま・みらい」(1) —美術館と大学との連携において学生は何を学んだのか— | 春原史寛・喜多村徹雄・茂木一司・宮川紗織 深須砂里・西村圭吾・飯島 渉・中平千尋 金泉志保美・木村美沙紀・佐光恵子・松崎奈々子 高橋珠実・相京奈々子・新井淑弘 |
| 障害を持つ子どもときょうだいを育てる父親の思い | 三田純義・知久鉄平・鳥山将太 |
| 技術教育における防犯に関する課題解決学習の試み | 橋詰倫典・古田貴久 |
| 計測・制御分野の実習授業における生徒のキー入力と成績評価について | 田中麻里・深谷晃世・大里絵里子・星野雅範 |
| 群馬県太田市九合地区の地域特性を子どもたちに伝える 「九合村物語」の制作と読み語りの実践 | Raymond HOOGENBOOM and Barry KEITH |
| Increasing Spoken Output through Extensive Listening and Audio Journals | 浦崎源次 |
| 知的障害教育における「日常生活の指導」概念の検討 | 山本綾乃・二神麗子・金澤貴之 |
| 教育実習における聴覚障害学生の情報保障のあり方に関する一考察 —4人の聴覚障害学生の実践事例から— | 仲濱佳穂・金澤貴之・霜田浩信 |
| 聴覚・知的重複障害者Tさんとの「調べ学習」の展開に関する実践的研究 —「なんで」という疑問詞の獲得プロセスに注目して— | 新藤 慶 |
| 産炭地における子どもの姿と教育実践 —1950年代～1960年代前半の研究をもとにして— | 佐藤浩一 |
| 教育実践現場での成果検証の方法 —教職大学院における課題研究に基づく検討— | 藤井智章・佐藤浩一・武井英昭 |
| 伝え合う力を育む中学校国語科の学習指導 —メタ認知の視点を取り入れた話し合い活動を通して— | 岡田由美・佐藤浩一・武井英昭 |
| 中学校国語科における文章を読み深めるための指導 —文章を視覚的にとらえる図表化活動を通して— | 富澤(猿山) 恵未・佐藤浩一・石川克博 |
| 小学校国語科における話し合いを深めるための学習指導 —Thinking Together Programmeの導入を通して— | 鈴木智信・武井英昭・佐藤浩一 |
| 小学校6年生の国語科における書く力を育てる指導方法について —モニタリング育成による表現内容の構造化・推敲を通して— | 矢島 正・高橋 望・新藤 慶・山本宏樹 |
| 初任者教員に期待される職務能力基準(試案) —小学校2年生・4年生の「学習指導」「学級経営」「生徒指導」を例に— | 山口陽弘・新藤 慶 |
| 群馬大学教職大学院の修了生への調査からみられる教職大学院の成果と改善点の検討Ⅲ —ストレートマスターへの個別インタビュー調査分析— | 音山若穂・利根川智子・三浦主博 |
| 教育・保育における対話型アプローチ —現状と課題— | 森坂美紀人・中原靖友・豊岡大画 |
| 図画工作科における言語活動の様相 | 岩瀧大樹・山崎洋史 |
| 教職志望学生のメンタルヘルスに関する研究 —教育実習事前におけるサポートの検討— | |

● 報 告

センター協議会・フレッドシップ事業・資料室利用状況

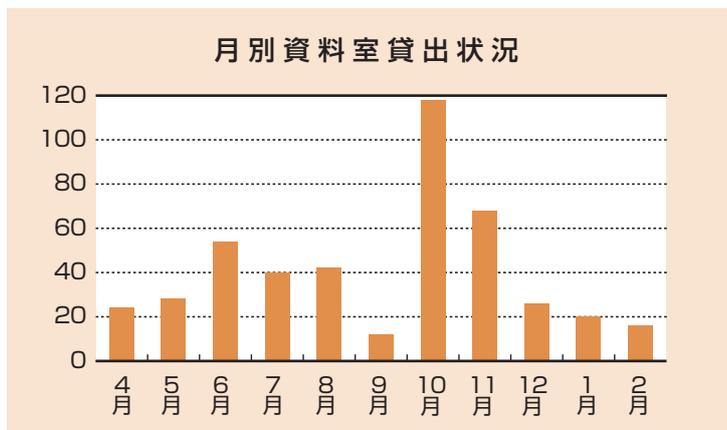
教育実習・実践開発部門 黒羽 正 見

■国立大学教育実践研究関連センター協議会への参加

平成26年9月17日に岐阜大学で開催された第85国立大学教育実践研究関連センター協議会に参加してきました。午前中は各部門の活動状況や計画に関する報告があり、教員養成カリキュラムや教職大学院、ICT関連等が中心の話題にあがりました。午後は各大学の活動報告と各部門会議がありました。各大学の報告では教職大学院開設に向けた実践センター改組による縮小傾向の話題が多数ありました。大学の教育学部が教員養成だけでなく、地域の教育力向上と教育課題解決に寄与することが求められている今日、各実践センターの果たす役割の重要性について再確認しました。また平成27年2月13日に東京学芸大学で開催された第86国立大学教育実践研究関連センター協議会の総会では、文部科学省の佐藤弘教授より、教育改革に関するご講演をいただきました。特に、ミッションの再定義のなかで、教員養成分野における目指す型や強みを明確にしていくこと、グローバル社会で求められる力の育成に関すること等に重点が置かれてました。また、部門会議は、自律的に学び続ける教師の核となる資質能力の解明と質保障に関する研究報告会に参加しました。そのなかで、学び続ける教員の核となる「資質能力」の解明の仕方や蓄積の在り方を中心に活発なディスカッションが行われました。

■センター資料室の利用状況

本センターの資料室は、学生や教職員の皆様に利用が可能です。とくに全国の教育実践センター紀要や群馬県



内の小中学校で使用されている教科書、教師用指導書、学習指導書編、附属DVD-ROM、附属CD-ROM等があります。教育実習準備、卒業・修士論文や教育実践報告の参考文献をはじめ、さまざまな教育実践や研究活動にご活用下さい。

センター紀要は当センターのホームページからも検索可能です。今年度の教科書教材やセンター紀要論文の利用状況の詳細は、左グラフの通りです。教育実習のための教科書類は充実しているので、多くの学生に活用して欲しいです。また、カリキュラム管理室（県内

の小中学校の学習指導案等の整理・保管）が整いました。指導案作成の際、活用するように学生への連絡をお願いします。

■フレッドシップ事業

10月25～26日、一昨年度から引き続き、国立赤城青少年交流の家と協働しつつ、地域の子どもたちを支える取り組みを実施しました。特に今年度は「あきのアウトドアフェスタ」の運営、体験活動のサポートが中核でした。28名の参加学生は、普段なかなか触れ合う機会の少ない、就学前の子どもたちと接することに戸惑いもあったようですが、一緒に火起こしや丸太切り、空き缶での炊飯やロープワークなど、様々な活動に取り組んでいました。子どもたちの、「できた!」や「お兄ちゃん、すごい!」、「お姉ちゃん、ありがとう!」などの言葉に、学生たちは照れながらも「分かりやすく伝える」、「子どもたちの安全」などの点について知見を深めていました。また、イベントの取り組みや運営に参加できたことで、事前の計画の重要性、適切な役割分担、臨機応変かつ柔軟な対応、協働した問題解決などの面でも、多くのものを得られたようです。これらの体験を幅広い子どもたちの理解につなげるとともに、教育実習などに積極的に活かしてくれることを期待しています。



● 報 告

次年度へ向けた取組の紹介

教育実習・実践開発部門 黒羽正見

■平成27年の「現代的学校教育の課題解決シリーズ2015」の「学び合う仲間による教員研修リレー講座」の事業内容が、下記の通り決まりました。リレー講座の詳細については、各学校へ案内ポスターを配布し、当センターのホームページでも掲載しています。多数の参加をお待ちしております。

2015 現代的学校教育課題解決シリーズ日程

学び合う仲間による教員研修リレー講座

| 講座日 | 担当/所属/専門分野 | 内 容 |
|-----------------|--|---|
| 第1回講座 5月9日 | 13:30~15:00 (昭和女子大学大学院) 山崎 洋史 教授/臨床心理学 | 今、改めてカウンセリングの理論を考察する |
| 第2回講座 5月16日 | 13:30~15:00 (常葉大学) 堀井 啓幸 教授/教育経営 | 学校と家庭・地域の連携を考える ーコミュニティ・スクールの視点からー |
| 第3回講座 5月23日 | 13:30~15:00 (前東京学芸大学講師・清瀬市教育相談センター教育相談室主任) 清水 勇 講師/コミュニティ支援 | 地域と連携した包括的な子ども・家庭への支援 |
| 第4回講座 5月30日 | 13:30~15:00 (群馬大学) 岩瀧 大樹 准教授/スクールカウンセリング | 不登校への支援を考える ースクールカウンセラーとの連携を目指してー |
| 第5回講座 6月6日 | 13:30~15:00 (群馬大学) 日置 英彰 教授/有機化学 | 理科の視点からくすり教育を考える |
| 第6回講座 6月13日 | 13:30~15:00 (山形大学) 木村 松子 准教授/ジェンダー論 | 国語教材から学ぶケアリング |
| 第7回講座 6月20日 | 13:30~15:00 (群馬大学) 霜田 浩信 准教授/障害児心理学 | 発達障害児に対する個別の指導計画の作成 |
| 第8回講座 6月27日 | 13:30~15:00 (東京学芸大学) 佐々木 幸寿 教授/教育行政学 | 教師のための教育法規 |
| 第9回講座 7月4日 | 13:30~15:00 (群馬大学) 渡部 孝子 教授/英語教育 | 小学校外国語活動の可能性を広げるアプローチ |
| 第10回講座 7月11日 | 13:30~15:00 (群馬大学) 黒羽 正見 教授/教師教育 | 生き抜く力を育む教育課程へのアプローチ ー地域を巻き込みながら創る教育課程経営ー |

■群馬大学教育学部研究科長期研修院 附属学校教育臨床総合センター

附属学校教育臨床総合センターには、現職教員に群馬大学の施設・設備・教員を有効に活用してもらい、実践的指導力を高める「学校ニーズに応じたオーダーメイド」の研修・研究制度があります。平成27年度も4月から以下のような教育研修員・研究協力員制度をスタートさせます。大学の研究知と学校現場の実践知の往環・統合を図りながら、現職教員の資質能力の向上と学校組織の成長をめざしていく協働的支援活動です。

○ 教育研修員・研究協力員の募集

附属学校教育臨床総合センターを利用して、実践的な研究を推進するための教育研修員・研究協力員制度があります。研究協力員は、毎年1回(5月末日まで)の募集となります。教育研修員は、平成27年度4月1日(水)より随時受け付けます。群馬県内外の先生方による教育研修・教育研究に際して、附属学校教育臨床総合センターが多少なりともお役に立てれば幸いです。

○ 学校経営サロンのお誘い

学校経営サロンは、現職学校教員と大学教員が学校経営について語る場を構築するために設定されました。「サロン」と命名した理由は、日頃考えていること、感じていること等をざっくばらんに語る場をつくりたいという思いがあったからです。日々の教育実践あるいは実践をしていく中で感じる疑問など、大学教員とともに語り合いませんか。本サロンには附属学校教育臨床総合センター以外の学部、大学院の教員も参加する予定です。若手、中堅教員の参加を歓迎します。この自由な語り合いを通して、参加者一人ひとりが少しでも成長できたらいいですね。

教育研修員・研究協力員の応募方法及び学校経営サロンへの参加の詳細については、当センターのホームページをご覧ください。

群馬大学教育学部 附属学校教育臨床総合センターニュース第3号

発行日：平成27(2015)年3月

発行所：国立大学法人群馬大学教育学部附属学校教育臨床総合センター

〒371-8510 前橋市荒牧町四丁目2番地 TEL 027-220-7385 FAX 027-220-7381

URL <http://www.edu.gunma-u.ac.jp/r-center/>